

語られた「生き甲斐」の構造

中山間地域調査における自由回答の数量的分析

吹野 卓*・片岡 佳美**

A Structure of Narrated “Meaning of Life”:
A Quantitative Analysis of Answers to an Open-ended Question in the Survey in
Hilly and Mountainous Areas

Takashi FUKINO and Yoshimi KATAOKA

キーワード：生き甲斐，中山間地域，質的データ，自由回答

1. はじめに

鳥根県の中山間地域で実施された質問紙調査に、「あなたが思う『生き甲斐』とは何ですか？自由にお書きください」という問いが含まれていた。この自由回答欄への記述は706件あり、そのそれぞれが回答者の生きてきた時間を踏まえた言葉であるように思われた。

本稿の目的は、この文章として収集されたデータを整理し把握することにある。どのような人びとが「生き甲斐」についてどのような語りをしているのかを分析するためには、まずは「語られた『生き甲斐』」を整理することから始めねばならないからである。そしてこれは同時に、文章で与えられた質的なデータを数量的に把握しようとする方法論的な試みでもある。

なお、ここで対象とするのはあくまでも「語られた『生き甲斐』」であり、それがそのまま語った人の生き甲斐を意味しているわけではない。人間はおのれ自身の存在理由を考えて

しまう存在であり、「生き甲斐」を語るのはまさに「生き甲斐」を探さねばならない人びとなのかもしれないのである。

2. 既存研究と方法

2.1 語られる「生き甲斐」

和田修一によれば、「生き甲斐」という言葉は元来、他者から評価される「生きているのうち、意義」という意味であった。しかし近代化がすすむなかで「生きていくはりあい、実感、目当て」という、自身の精神的な充足感としての意味が加わり、今日では後者の意味のほうが広く一般に受け入れられているという（高橋・和田2001）。すなわち、人間としての社会的な存在価値としてよりも、個人的な楽しみや喜びが「生き甲斐」という語の内容となってきたと言える。

調査データを見ても、たとえば「勤労青少年福祉に関する総合的な調査」（1999年実施）で、勤労青少年が自由時間に「生きがいを感じ

*鳥根大学法文学部教授（fukino@soc.shimane-u.ac.jp）

**鳥根大学法文学部助教授（kataoka@soc.shimane-u.ac.jp）

じるとき」として最も多くあげたのは、「趣味を楽しんでいるとき」(75.4%)、次いで「家族や友人、恋人と過ごしているとき」(73.6%)であった(厚生労働省2006)。ここでも、個人的な楽しみや喜びが「生き甲斐」として捉えられている。

このような形で「生き甲斐」が語られるようになった背景として、生活にゆとりができたこと、また個人主義化がすすみ自己の内面的充足やアイデンティティの確立が重視されるようになったことが指摘されている(高橋・和田2001)。

その一方で今日、「生き甲斐」は高齢者の生と結びつけられて語られることも多くなった。高齢者の家庭内や地域社会での地位と役割は不明確なものとなっている。そこで、行政の働きかけによる高齢者大学やボランティア活動など、高齢者が老後生活のビジョンを描くきっかけをつくるための社会的取り組みがすすめられている(望月ほか2002)。この文脈では、「生き甲斐」が充実した生を意味し、それを持つように社会からの働きかけがなされているのである。よって「本当の」生き甲斐について教示する専門書(たとえば、小林1989)などが登場したり、行政がさまざまなお膳立てをしたりする。

現代人にとって、「生き甲斐」は「個人的な楽しみや喜び」であってもよい。ただし、それを持つことが、社会的に価値あるとされる「アイデンティティの確立」や「充実した生」と結びつけられ、あたかも人間として必要なこととして規範化されているとも思えるのである。だとしたら現在、「生き甲斐」は一回りして再び他者から評価される「生きているねうち、意義」という元来の意味に立ち返りつつあるとも言える。

そして、生産性と効率性を基本的な価値と

する現代日本社会において、周辺的な位置に置かれた者たち、すなわちおのれの「生きているねうち」を確認しなければならない者たちにこそ、「生き甲斐」は必要な物語なのかもしれない。

このような視点にたつとき、どのような人びとが「生き甲斐」についてどのような語りをしているのかを分析することは、現代日本社会を理解する上で有意義なことだと思われる。また、生産性と効率の論理からは周辺的な位置に置かれた過疎化と高齢化が進む中山間地域で実施された調査データは、興味深いものである。

2.2 語られた言葉の分析

神谷美恵子は、どのような欲求を満たすかという基準で生き甲斐を7つに分類した。すなわち、(1) 生存充実感への欲求、(2) 変化と成長への欲求、(3) 未来性への欲求、(4) 反響への欲求、(5) 自由への欲求、(6) 自己実現への欲求、(7) 意味への欲求を満たすものとしての生き甲斐である(神谷1966)。

神谷の分類は、「生き甲斐」そのものを整理しようとするものである。しかし、本稿のねらいは「生き甲斐」がどう語られているのかを整理し把握することにある。このような「語られた『生き甲斐』」に焦点を当てた研究は今のところほとんど存在していないと思われる。

さて、本稿では自由回答欄に対する記述を分析の対象とする。このような自由回答法によるデータは、調査者があらかじめ用意した回答選択肢から回答を選択してもらう方法と異なり、選択肢という範囲を設けると抑制されてしまう反応を拾い上げることができるという点でメリットがある(川端1999)。調査者が思いもつかなかった回答はもちろん、言葉遣いや微妙なニュアンスの違い、文脈などに

も配慮し、データのシンボリックな意味を吟味することができる(Krippendorff 1980=1989)。

こうした非定型のデータをどのように分析するかについては、まだまだ開拓の余地が大きいといってよいが、オーソドックスな方法としては内容分析(content analysis)がある。

内容分析には、要約的内容分析、説明的内容分析、構造化内容分析の技法がある。斎藤進也らが整理したところによれば、要約的内容分析は、分析者が設定したコーディング・ユニットにもとづいてデータをカウントし、その特徴を浮き彫りにする方法である。説明的内容分析は、文章をその文脈に応じて解説し潜在した内容を明らかにしていく方法である。そして、構造化内容分析は、コーディング・ユニットをもとにコンテキスト・ユニットを設定し、より抽象化して全体を把握しようとする方法である(斎藤・稲葉2004)。

近年では質的データ解析ソフトも発達し、データの分類やカウンティング、コーディング・ユニット間の関連性といった分析がコンピュータでおこなえるようになってきている。日本語テキスト用のソフトとしては、AUTO-CODEやKHCoderなどがあり、それらを用いれば要約的内容分析などでは労力を大幅に削減できる(川端1999;大瀧・樋口2006)。とはいえ、コーディング・ユニットの設定や評価は、結局分析者がおこなわなければならない。その手続きに際しては定型化された手法がないために、分析者のバイアスが入ってしまう可能性が否めない。

そこで、こうした問題を克服するための工夫をした研究もなされている。たとえば、過去14年間に発行された家族研究の学術雑誌でエスニシティの問題がどのように扱われてきたかを調べるため、ピーンらは複数の分析者

にそれらの雑誌に掲載された論文を分類させ、その結果を2人の評定者に2回以上吟味させた(Beane *et al.* 2002)。また、ハーバートらも、同じデータを複数の評定者が個別に検討した結果を比較したり、同一評定者が同じデータを何度も同じように評価するかどうか調べたりすることで、信頼性の問題に対処できると考えている(Harbert *et al.* 1992)。

本稿での分析でも、特定の分析者のバイアスがかからないよう、複数の評定者にデータを評価させる。

2.3 データの概要

今回用いるデータは、島根県雲南市において自治会経由で住民に調査票を配布し回答を得た「生き甲斐に関するアンケート調査」からのものである(配布数は3,985件、回収数は1,587件)¹⁾。分析は、この調査票の「問29 あなたが思う『生き甲斐』とは何ですか?自由にお書きください。」という設問から得られた自由回答を中心におこなう。設問文から分かるように、この設問は必ずしも回答者にとっての生き甲斐を直接問うものとなっていない点に注意が必要である。ただし、回答者のほとんどはこの問いを自分自身の生き甲斐は何かという意味と解釈して回答しているように思われた。

回答欄への記入があったものは、706件であった(回答率44.5%)。これらの自由回答は平均文字数62.7字、最大文字数640字で、かなりしっかりと書き込まれていた。一般に質問紙調査においては100%の回収率は望めず、データは「調査に協力した」という事実からすでに偏りを含んだものであると考えねばならない。さらに調査票の中の自由回答を用いるばあいには、その問いに対して「文章を記述した」という二重の偏りが生じていること

表2 自由回答欄記入の有無別にみた職業比率 (%)

	会社員・ 公務員 (事務職)	会社員・ 公務員 (技能職)	専門職 (医師・ 教員等)	農業自営	農業以外 の自営	主婦	学生・ 無職	その他
記述あり	15.4	16.4	5.0	13.0	8.3	17.8	14.0	10.2
記述なし	14.1	25.2	3.0	14.4	11.1	11.5	13.0	7.8
全回答者	14.7	21.2	3.9	13.7	9.8	14.3	13.4	8.9

※ $\chi^2=33.17$ $p<.001$

表1 自由回答欄記入の有無別にみた平均年齢, 男性比率

	平均年齢 (歳)	男性比率 (%)
記述あり	59.2	55.6
記述なし	57.8	64.8
全回答者	58.4	60.6

※平均年齢 ($t=2.04$ $p<.05$) 男性比率 ($\chi^2=12.98$ $p<.001$)

をも認識しておく必要がある。

さて、自由回答欄記入者の特徴を回答者全体と比較してみたところ、表1に示すように、自由回答欄記入者ではやや年齢が高く、女性が多い。また、職業については表2に示すように、「主婦」が多く、「会社員・公務員(技能職)」で少ないという傾向がみられた。

2.4 分析の方針

ここで対象とする自由回答欄への記述内容には、たとえば「地域の間関係が…喜びである」と書かれたものもあれば、「地域の間関係が…嫌だ」と書かれたものもあった。これらを見分けることは単語レベルの分析では困難である。かといって、きわめて多様な内容をもつ706件もの文章に含まれた意味連関を、研究者の手によって抽出していった場合には客観性の維持が困難であり、また数量的分析のための準備作業としても適切とは思えない。

そこで、ここではまず次の2つの方法で文書データのそれぞれに「値」を与えたい。

①言及事項のチェック

まず自由回答欄で頻繁に言及されている事項のリスト(17項目)を作成した。その後、再び回答を読みながらそれらの事項に関する言及の有無をチェックする。

②評定者による印象評定

5人の評定者に自由回答を読んでもらい、その文章から受けた印象を25の側面について7点尺度で評定してもらう。

上記①の17項目の言及事項リスト、および②の印象評定に用いた25の側面は、筆者らが自らの観点で選択したものである。すなわち、これらは必ずしも客観的・網羅的なものとは言えない。ただし、この点は、質問紙調査にどのような質問項目を入れるかという問題と同型であり、われわれは現実から切り出そうとしたものしか切り出せないという必然的な制約である。

②の印象評定については、多少の注意が必要である。もし関心の対象が「『生き甲斐』は何か」ということにあるのであれば、評定者の印象から測定するのは的はずれと言わねばならない。しかし、本稿での関心は「語られた『生き甲斐』にある。すなわち、『生き甲斐』とは何ですか」と問われたときに、どの

ような回答がなされているのかが問題とされているのである。この「どのような回答か」を複数の評定者が受けた印象から測定することは妥当であると思われる。そしてこの印象評定結果を因子分析にかけるが、そこで出されるものはあくまで「語られた『生き甲斐』」が与える印象の構造である。

さて、上述の①の言及事項を、②の印象評定から見いだした潜在的因子の軸上にマッピングすることによって、「生き甲斐」として語られた事項がどのような印象を与える語りの中でなされているのかを把握することができる。本稿で試みようとするのは、このマップを提示しそれを読むことである。そして、それが読むに値するものであるならば、本稿で採用した分析手法もまた価値を有するものであると言えよう。

以下では、(1)言及事項のチェック、(2)複数の評定者による印象評定、(3)印象評定項目の因子分析、(4)印象因子の空間への言及事項のマッピング、という順で分析を進めていく。

3. 言及事項のチェックと印象の評定

3.1 言及事項のチェック

まず筆者らは、「生き甲斐」についての自由回答を丁寧に読み込み、続いてKHCoderによって単語(名詞)の出現数を調べた。その結果を参考にしながら、「生き甲斐である」または「生き甲斐のために必要である」という意味で言及されている事項のリストを作成した。その際、できるだけ多くの回答者の記述がその何れかの事項に当てはまるように留意し、結果として17項目のリストとなった(付録1参照)。

このリスト作成後、再び自由回答を1ケー

スずつ読み、17項目の事項への肯定的な言及の有無をチェックした。なお同一の回答者が複数の事項について言及している場合には各事項を「言及あり」とした。このチェックは2人の筆者が個別におこない、2人のうち少なくとも1人が「言及あり」とすれば、それを優先した。ただし、2人のあいだの判断のズレは比較的小さかった。

結果として、ほとんどの回答者(95.3%)がリストアップされた17事項のいずれかに言及しており、また1人の回答者が複数の事項に言及している場合も多かった。言及されていた事項としては、表3にみるように、「家族」がもっとも多く(256件)、次に「健康」が多い(217件)。作物を育てることなどの「農事」がかなり見られたのは(77件)、地域特性によるものであろう。

なお、数量化Ⅲ類を用いて、これらの言及事項の整理を試みたが理解しやすい整理軸を

表3 言及事項の出現頻度

言及事項	件数	比率
家族	256	36.3%
健康	217	30.7%
信条	165	23.4%
趣味・楽しみ	144	20.4%
仕事	127	18.0%
友人・地域との繋がり	104	14.7%
社会貢献	88	12.5%
農事	77	10.9%
自分の必要感	72	10.2%
生活基盤	55	7.8%
自由	50	7.1%
成長	29	4.1%
夢・願望	20	2.8%
自然	20	2.8%
継承・財産	15	2.1%
過去	9	1.3%
宗教	8	1.1%

見いだすことはできなかった。

3.2 評定者による印象評定

続いて、全706ケースの自由回答とケース番号のみを印字したものを5人の評定者にそれぞれ配布し、記述されている内容から受ける印象について評価してもらった。評定者は、社会学を専攻する学部生4名と大学院生1名で、男性3名・女性2名であった。

それぞれの自由回答についての印象評定の方法は、次のとおりである。全自由回答を熟読した筆者らは、各ケースが与える印象の多様性を掘むための指標25項目を設定した。25項目は、「イキイキしているーイキイキしていない」「役に立ちたいー役に立ちたいとは思っていない」などからなる。評定者には、各ケースがどちらの極により近いかを7点尺度で評定してもらった。項目の詳細は、付録2に示すとおりである。

評定者間で認識が大きくずれないように、事前に評定者全員を集め、自由回答の設問内容や25の評定項目について、筆者らが用意した評定マニュアルに従って説明した。各評定者には、互いに相談しあうことなく個別に評定作業をおこなうよう指示した。また、706ケースはランダムに並べ替えられており、評定者ごとに順序は異なっている。自由回答以外の、性別や年齢などといった回答者に関する情報は一切与えなかった。

3.3 印象評定項目の因子分析

各項目について、5人の評定者の与えた得点を合わせて尺度化したときの信頼性を調べるため、クロンバックの α 係数を求めた。各項目での α 係数が低いと、各評定者間の評定結果に一貫性がないということになり尺度化しても意味がない。結果、 $\alpha=.70$ 以下しか示さ

ない項目が9つあった。以下の分析では、これらを除く16項目を用いることにする。

この16項目については、まず各評定者がつけた素点を標準化し、そののち項目ごとの評定者の平均値を算出し、それらを各回答者のその項目得点とした。

この16の評定項目についての回答者の得点をもとに因子分析をおこなったところ、固有値1以上の因子が3つ抽出された(主因子法、バリマックス回転)。その結果を示したのが表4である。

表4 評定項目の因子分析結果

	因子1 安定	因子2 自己	因子3 社会
不満がある	-.916	-.043	-.136
疲れている	-.810	-.267	-.154
不安がある	-.787	-.162	-.066
穏やかである	.773	-.065	.181
イキイキしている	.763	.482	.224
自分に満足している	.751	.258	.118
諦めがある	-.741	-.437	-.164
前向きである	.710	.515	.248
アクティブである	.469	.749	.156
向上心がある	.329	.748	.372
自分らしくありたい	.292	.729	-.054
信念がある	.178	.726	.230
生き甲斐を考えている	.366	.588	.366
内輪を向いている	.150	-.446	-.076
役に立ちたい	.170	.209	.960
人と関わりたい	.310	.351	.454
因子寄与率(%)	35.2	23.4	10.7

因子負荷量から、第1因子は精神的安定性についての評定項目と強く関連しており、第2因子は自己の活動や自己実現についての評定項目と強く関連しており、第3因子は他者と関わりについての評定項目と強く関連しているといえる。ゆえに以下では、それぞれを「安定因子」「自己因子」「社会因子」と呼ぶこと

にする。

各回答者には、この3因子の因子得点を、「語られた『生き甲斐』」の安定因子・自己因子・社会因子の得点として与えた。なお、安定因子の得点が低いからといって、「安定を求めている」ことを意味するのではなく、「安定していない」という印象を評定者が受けたことを意味している点に注意されたい。

4. 言及事項のマッピング

4.1 言及事項と3つの因子の平均値

先にみた17の言及事項のそれぞれについて、「言及している回答者」の3つの因子得点の平均値を示したのが表5である(因子得点は標準化されているので全体の平均は0となる)。なお表には、各事項に「言及している回答者」

表5 各事項への言及者の各因子得点平均値

	安定因子 平均	自己因子 平均	社会因子 平均
家族	.192**	-.263**	.451**
健康	.261**	-.092	-.058
信条	.150*	.449**	-.079
趣味・楽しみ	.266**	.325**	-.217**
仕事	.129	.292**	.231**
友人・地域との繋がり	.294**	.439**	.283**
社会貢献	.054	.546**	1.157**
農事	.364**	.394**	-.091
自分の必要感	-.051	.233**	1.154**
生活基盤	-.677**	-.116	-.185
自由	-.561**	.360**	-.505**
成長	-.032	1.043**	.461*
夢・願望	-.065	.105	-.315
自然	.122	.138	-.298
継承・財産	-.170	-.079	.348
過去	.164	.059	-.105
宗教	.096	.643	.146

※**... $p < .01$, *... $p < .05$

と「言及していない回答者」での平均値の差の検定結果も示しておいた。

表5から、たとえば「健康」に関する言及がなされている自由回答に対して、5人の評定者たちは安定因子がやや高いという評定をおこなっている傾向があることがわかる。また、この「健康」言及者の自己因子と社会因子の得点平均は0に近く中程度であることが示されている。

4.2 言及事項のマッピング

前節での結果をもとに、各事項に言及している回答者の3つの因子得点の平均を、3次元空間上にプロットすることが可能である。そうすることで、それぞれの事項に関する言及が、どのような印象を与える「語り」の中でなされているのかが明確になる。ただし平面上に3次元空間上のプロットを示しても見にくいので、2つの次元ずつ、3枚の平面図でその結果を示したい。

図1~3に示されたマップを見ると、「自由」に言及した回答は自己因子が高いだけで安定因子や社会因子は低かったり、また、「成長」に言及した回答は自己因子も社会因子もともに高かったりするなど、たしかに「なるほど」と思われる配置となっている。もちろんこれは、各事項への言及という「刺激」が、評定者の印象に与えた影響を反映したものであろう。とはいえ評定者は、単に単語レベルでの言及事項に反応したのではなく、文全体の意味を理解しながら印象を形成していったはずである。そのようにみれば、中山間地域の人たちによって語られている「生き甲斐」の構造的な把握が、こうしたマッピングによって可能となったといえよう。表3に示したような言及事項の出現頻度をみるだけでは不可能な言及事項の整理ができたという点で、こ

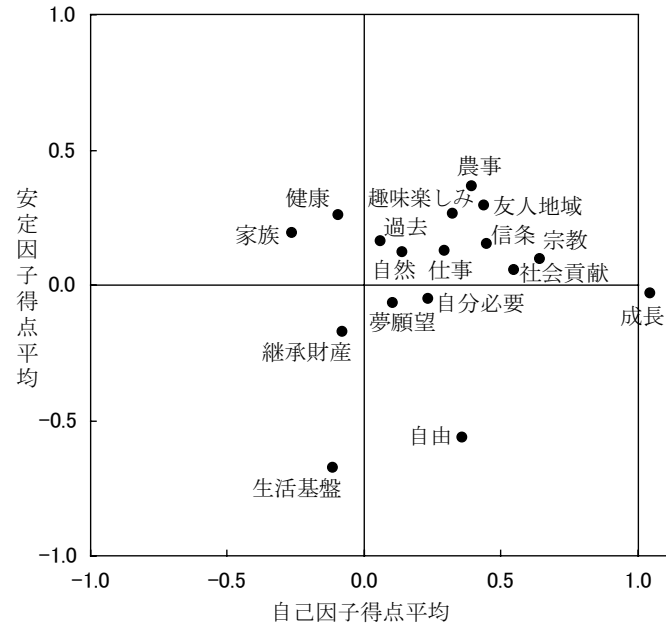


図1 言及項目のマッピング
(安定因子平均×自己因子平均)

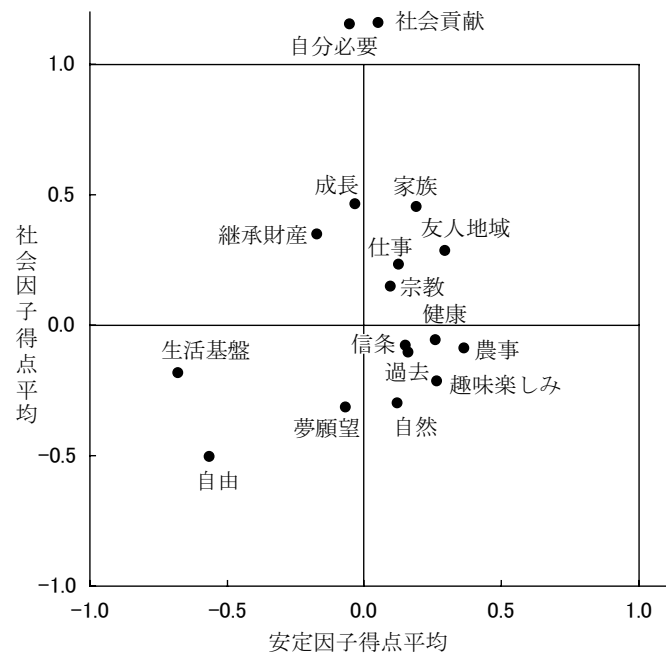


図2 言及項目のマッピング
(安定因子平均×社会因子平均)

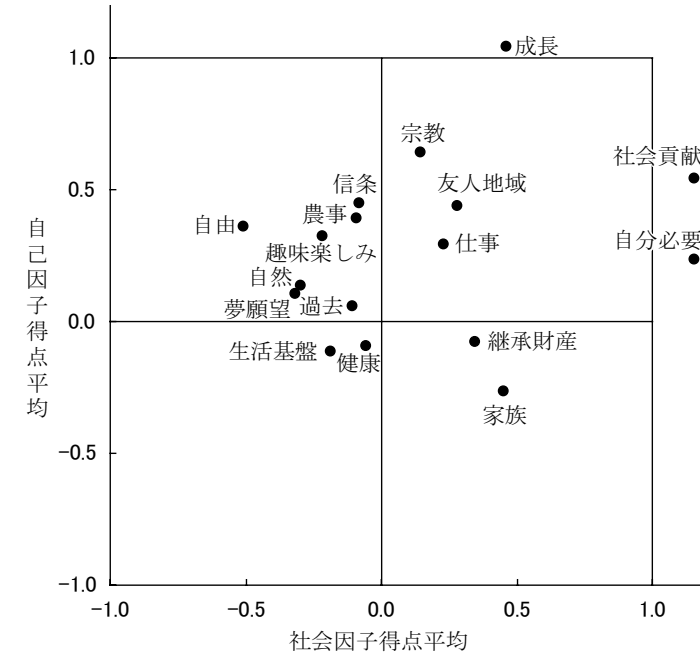


図3 言及項目のマッピング
(社会因子平均×自己因子平均)

ここに示されたマップは有意義なものと思われる。

4.3 マッピング結果の考察

マッピングの結果を見ながら、ここで若干の考察をおこないたい。言及事項のなかで、安定因子においてとくに低い得点を示したのは「生活基盤」と「自由」であった。「生活基盤」について言及している回答には、たとえば次のようなものがある。

「豊かな老後を送りたい。日々現金のいらぬ生活が望み 何もしなくても金が必要だ」

一方、「自由」について言及している回答には、次のようなものがある。

「自分の自由に過ごす時間がない。地域が閉鎖的な慣習がある。」

「(前略) 子供の時から、男のがき大将ばかりいて、自分の思う様な事が出来ない。(中略) 男の家はずるがしこく女はいつもたえなければならない。女の家は村八分みたいな生活をしなければならない。(後略)」

安定因子の得点が低いところで語られる生き甲斐は、「生き甲斐」の辞書的な意味とは異なっている。おそらく、生活基盤や自由さえ確保されれば生き甲斐があるのに…という思いから発せられた語りなのだろう。それは、生き甲斐がない(と本人が認識する)現状に対する苛立ち、不満である。

ところで今回「生き甲斐」として語られていた事項の大半は、安定因子得点が高く、自己因子得点、または社会因子得点も高かった。このうち、自己因子得点が高いものとして目

立ったものには「農事」「趣味・楽しみ」「信条」があった。社会因子得点が高いものとして目立ったものには「家族」「友人・地域との繋がり」があった。そして、自己因子得点と社会因子得点の両方が高いものとして目立ったものには「成長」「社会貢献」「自分の必要感」といったものがあった。

安定因子と自己因子の両方の得点が高いところでは、一般によくイメージされている生き甲斐が集まっている。このことは、生き甲斐ブームの背景として、経済的に豊かになったことや、自己の内面の充足に対する欲求が高まったことを指摘する既存研究での議論と矛盾しない。社会因子の得点が高いかどうかの違いはあっても、達成することや充実すること、つまり自分の人生に自ら目的をつくりそれに向かって行動する生きかたが語られているのである。そのような生きかたは、自己というものが強く意識されていなければ不可能である。その意味で、生き甲斐は、個人的な問題とされているといえる。近代以前の社会から人びとがおこなってきた「農事」でさえ、いまやそうなのである。たとえば、次のような回答例がある。

「元気で働くことです。作物を育てて、成長する姿が楽しみです。作った物をひとにあげてよこばれる時、嬉しいです。子供達に送ってあげたり、市場に出したり、そんな日々のなかで生き甲斐を思い出しています。農業は主人と2人でやっていますが、体の続く限り頑張りたいと思います。」

ところで、今回の自由回答でもっとも頻度の高い言及事項は「家族」、そして「健康」であった。これらの事項は、自己因子得点が低かった。このように自己因子得点の低い事項

への言及が量的に多かったことは注目に値する。これが、生産性や効率性の面で不利な土地柄上、一般に「生き甲斐」として考えられていることがらを達成するのがより困難な中山間地域だからこそみられる現象なのかどうかは分からない。ただ、能動的で強い個を前面に出すことなく生きる意義を考える人びとが、そこに多くみられるということは言えるだろう。例として、家族が生き甲斐と述べる人たちの回答をあげておく。これらの人びとは、他者との共生を享受したがっている。

「家族に必要とされ元気で両親の世話が出来、現在は、それに生き甲斐を感じ夕食時今日の夕食おいしかったヨありがとうおばあちゃんと言ってくれるのを心から嬉しく、感謝している毎日です。自分のために使える時間より、人の為家族の為に使え時間があります。」

「(前略) 嫁が親と一緒に暮らしたいとの申し出に私は夢の様なよろこびに毎日涙しております。(中略) 親孝行の息子夫婦と孫に生き甲斐なのです。(中略) 私は腹話術をやるので、毎日人形を抱き鏡に向かい練習しています。赤ちゃんになりきって、子守のおしん人形を抱き、『ゆりかごのうた』、『しかられて』等日本の心のうたを歌わせ、『お父さんお母さん私を生んでくださってありがとう。』の言葉を言わせるとき、家族のいない一人の時は私は、天を仰ぎ地に伏して泣くようになりました。この事から自分自身が中心であった生活に、悔い改め、この年になって恥ずかしながら感謝に目覚め生き甲斐を感じます。今まで演芸的であった腹話術も講演依頼もあり、親孝行感謝のお話と、お

しんちゃんをやる時泣いて下さる時に共に泣き生き甲斐を感じます。(後略)」

以上、マッピング結果からの考察をおこなったが、言及事項のマッピング上の位置は、その語り手の生活の背景や人生に対する思いを何らかの形で反映していると言えよう。

なお、ここでのデータは中山間地域のものであり、また調査票が自治会経由で配布されたという事情から地域社会に根付いた比較的高齢層が多い人びとからのものとなっている。そのような特性は、おそらく言及事項マッピングの結果にも反映されていると考えるべきであろう。従って筆者らはこの結果が一般性をもった「語られた『生き甲斐』」の構造を示しているものとは考えていない。そうではなく、むしろたとえば都市部での調査結果と比較すべきものとして理解すべきである。たとえば「健康」に関する言及は、都市部ではより自己実現的なニュアンスで語られるかもしれないのである。

5. おわりに

本稿では、「語られた『生き甲斐』」を評定者が受けた印象から抽出した3つの軸によって整理し、具体的な言及項目をその3軸からなる空間上に位置づける試みをおこなった。またその結果としての言及項目マッピングは、それなりに示唆に富むものであったと言えよう。

これは、たしかに評定者が受けた印象という心理学的事象を手がかりにした試みである。しかし出てきた結果が読むに値するということが、単なる「評定者を被験者とした印象形成の心理学的研究」ではなく、質的データを数量的に取り扱うための手法として有意義で

あることを示している。周知のとおり質問紙調査の自由回答欄には、研究者が予想しえないさまざまな情報が潜んでいる。しかしそれをどう分析するのかは難しい問題である。本稿での手法は独自性が高いものであり、方法的にも一定の価値をもつと思われる。

さて、評定者の印象から抽出された3つの次元は、精神的な安定感に関する「安定因子」、活動や自己実現に関する「自己因子」、他者との関係に関する「社会因子」であった。どのような因子が抽出されるかは、評定項目に何が含まれていたかによって左右される。しかし、ここで見いだされた3つの因子には理解しやすいという長所がある。この理解しやすさは、「語られた『生き甲斐』」の今後の研究を進める上で有利なものである。

今後の課題は、回答者の属性などの諸変数と、「語られた『生き甲斐』」との関係の分析をおこなっていくことである。この点については既に、年齢と3つの因子得点の間には直線的な関係はないが、曲線的な関係があることなどが見いだされている。このように、ここでの整理で出された変数が外的変数と関連を有していることは、この整理の有効性の傍証であるとも言える。

また、筆者らは「生き甲斐」についての項目を含む新たな質問紙調査を準備中であるが、そのような調査の質問項目設定にも、今回見いだされた知見は生かすことができるであろう。

注

1) 本調査は、島根大学プロジェクト研究推進機構「重点研究部門」の助成を受けて、「中山間地域における住民福祉の向上のための地域マネジメントシステムの構築—「健康」と「生き甲斐」の学際的分析を通じたアプローチ」（代表：伊藤勝久生物資源科学部教授）の調査研究の一環として2005年度に実施されたものである。調査データの本稿での使用は、本研究プロジェクトのメンバーのご厚意によって可能となった。とくに自由回答のデータ入力に関しては、赤沢克洋生物資源科学部助教授にご協力いただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

参考文献

Bean, R.A., Crane, D.R. and Lewis, T.I., 2002, "Basic Research and Implications for Practice in Family Science: A Content Analysis and Status Report for U.S. Ethnic Group", *Family Relations*, 51, 15-21.

Herbert, E.M., Vinick, B.H. and Ekerdt, D.J., 1992, "Analyzing popular literature: emergent themes on marriage and retirement", in J. F. Gilgun, K. Daly and G. Handel (eds.), *Qualitative Methods in Family Research*, Sage Publication, 263-278.

神谷美恵子, 1966, 『生きがいについて』, みすず書房.

川端亮, 1999, 『非定型データのコーディング・システムとその利用（平成8～10年度文部省科学研究費補助金（基盤研究（A）（1）研究成果報告書）』.

厚生労働省, 2006, 「厚生労働省統計表データベースシステム統計調査別公表データ：勤労青少年福祉に関する総合的な調査（平成11年）」 (<http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei>)

/kouhyo/indexkr_32_1.html).

小林司, 1989, 『「生きがい」とは何か—自己実現へのみち—』, 日本放送出版協会.

Krippendorff, K., 1980, *Content Analysis: An Introduction to Its Methodology*, Sage Publication (三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳, 1989, 『メッセージ分析の技法—「内容分析」への招待』, 勁草書房.)

望月七重・李政元・包敏, 2002, 「高齢者のボランティア活動（参加・継続意向）に与える要因—高齢者大学の社会還元活動実態調査から—」, 『関西学院大学社会学部紀要』第91号, 181-193.

大瀧友織・樋口耕一, 2006, 「マンガを『言葉』で読む—計量的分析の試み—」, 吉村和馬・福間良明編, 『「はだしのゲン」がいた風景—マンガ・戦争・記憶—』, 梓出版社, 119-146.

斎藤進也・稲葉光行, 2004, 「質的内容分析によるインターネット・コミュニティの特性と成熟度に関する研究」, 『政策科学』11巻2号, 45-57.

高橋勇悦・和田修一編, 2001, 『生きがいの社会学—高齢社会における幸福とは何か—』, 弘文堂.

付録1 言及事項リスト

事項名	備考
家族	家族・子供・孫・妻・夫などの幸せ・成長・一緒の時間など
健康	自分の健康・元気・体力・病気・長生き・健康づくりなど
信条	素直, 感謝, 責任, 目標を持つ, 平凡, 迷惑かけないなど
趣味・楽しみ	具体的趣味, 楽しみとしての旅行など（ただ「趣味」とあるものなども含む）
仕事	自分の仕事（家事・仕事としての農業も含む）
友人・地域との繋がり	家族以外の他者との繋がり・交友・地域活動参加に関するもの
社会貢献	ボランティア, 市民運動（単なる繋がりを求めているだけで無いもの）
農事	作物を育てること（ガーデニングなどは含めない）
自分の必要感	誰かが自分を必要としていること
生活基盤	経済的基盤, 家屋など
自由	意志決定の自由, 時間的自由, しがらみからの自由
成長	向上・学ぶことなど（単なる「前向き」などは含まない）
夢・願望	将来の夢など
自然	田舎の空気・四季の移ろいなど
継承・財産	孫に土地を残す, 後を継がせるなど
過去	思い出, 苦勞経験など
宗教	信仰, 宗教活動, 布教など

付録2 印象評定の項目

項目名	低	高
イキイキ	イキイキしてない	イキイキしている
前向き	後ろ向きである	前向きである
穏やか	穏やかでない	穏やかである
自分らしく	自分を出すまいとしている	自分らしくありたい
人と関わりたい	人と関わりたくない	人と関わりたい
諦め	諦めがない	諦めがある
不満	不満がない	不満がある
不安	不安がない	不安がある
信念あり	信念があるといえない	信念がある
視野広い	視野が狭い	視野が広い
自分に満足	自分に不満	自分に満足
疲れている	疲れていない	疲れている
力入ってる	力が抜けている	力が入っている
内輪指向	外を向いている	内輪を向いている
生産的	非生産的	生産的
反省している	反省していない	反省している
自立している	依存している	自立している
アクティブ	アクティブでない	アクティブである
何かを残したい	残したいとはいえない	何かを残したい
生き甲斐考えてる	考えていない	考えている
生き甲斐必要	必要としていない	必要である
役に立ちたい	役に立ちたいとはいえない	役に立ちたい
内面指向	内面的でない	内面的である
夢がある	夢がない	夢がある
向上心ある	向上心があるといえない	向上心がある